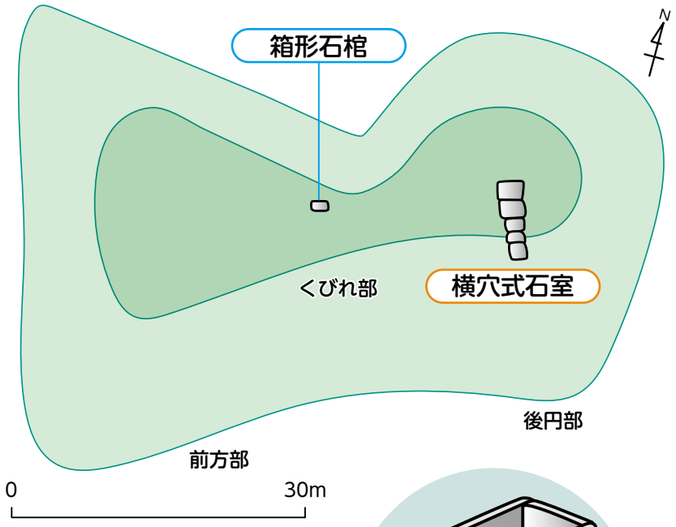
国指定文化財記念特集

風返稲荷山古墳出土品の魅力に迫る！

後編

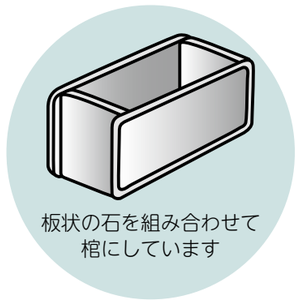
市歴史博物館が所蔵する「風返稲荷山古墳出土品」が、国指定文化財となりました。前月号（1月20日発行号）では、金銀で飾られた出土品の数々や風返古墳群などについて、概要を紹介しました。

今月号では、「風返稲荷山古墳出土品」の代表的な遺物について、どのように見つかったのかをイラストで紹介し、古墳に葬られた豪族が、どのような人物であったのかに迫ります。

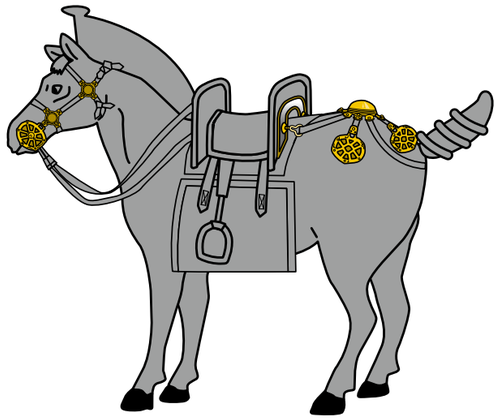


4基の石棺

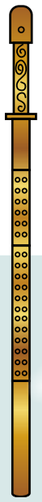
風返稲荷山古墳からは、古墳の「くびれ部」から箱形石棺1基、後円部から前室・後室からなる横穴式石室と、後室の中に造られた箱形石棺3基（奥棺・東棺・西棺）が見つかっています。いずれも筑波山系の山々で産出する岩石を使用して造られています。



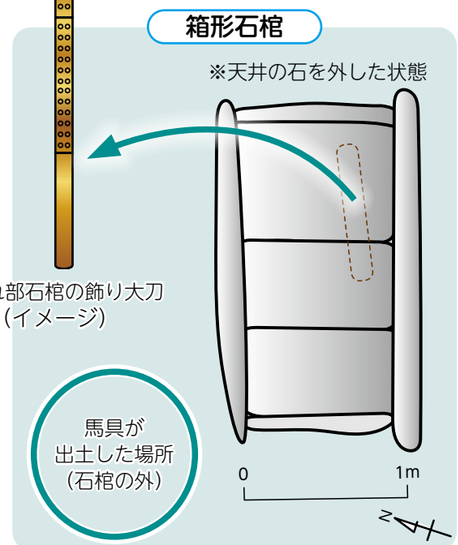
古墳からの出土品



くびれ部石棺外の馬具を装着した飾馬（イメージ）

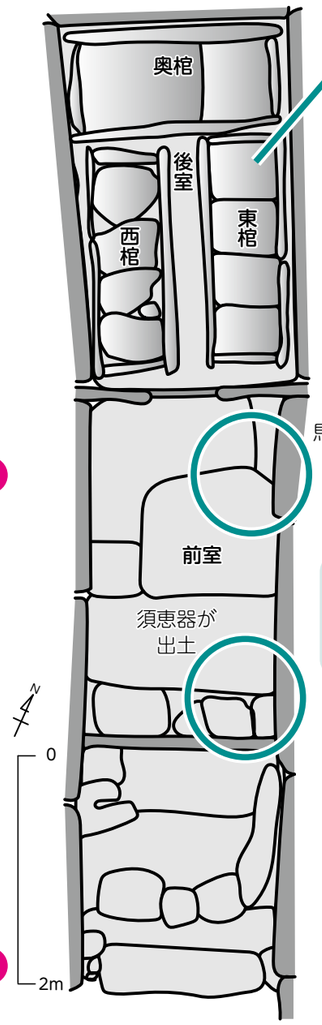


くびれ部石棺の飾り大刀（イメージ）

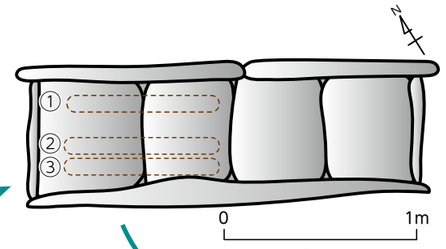


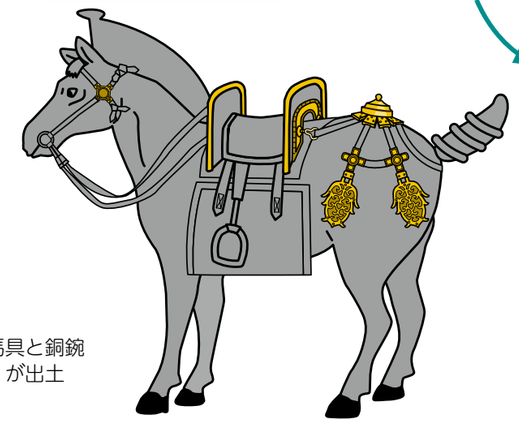
くびれ部の箱形石棺からは、飾り大刀（円頭大刀）が見つかっており、この石棺の外、すぐ近く（右図の円の範囲）からは、馬具が出土しています。

※飾馬のイラストは九州国立博物館発行『馬　アジアを駆けた二千年』などを参考に作成しています。

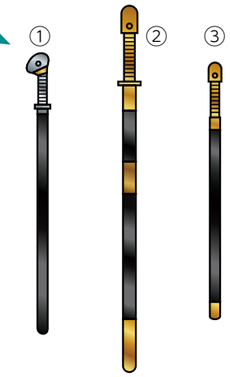


横穴式石室の前室からは、馬具や銅鋺、須恵器が出土しており、後室の東棺からは飾り大刀（頭椎大刀①、円頭大刀②③）、西棺からは装身具が出土しています。





横穴式石室（前室）の馬具を装着した飾馬②（イメージ）



横穴式石室東棺の飾り大刀（イメージ）

風返稲荷山古墳の馬具・飾り大刀の秘密

本古墳の出土品のうち、馬具や飾り大刀はその多くが金銅製（一部は銀製）です。

金銅製品は、鉄を地金とし、その上に薄くのばした銅板を張り、そこに鍍金を施しています。鍍金は、金を水銀に溶かし、銅板に塗布した上で水銀を蒸発させるという「金アマルガム法」という当時の最先端技術で施されています。

時代は下り、天平時代（8世紀頃）に造立された東大寺の大仏も同じ技法で鍍金されていたとされています。

横穴式石室から見つかった杏葉

風返稲荷山古墳の豪族

風返稲荷山古墳出土品が日本を代表する古墳時代の資料に位置付けられた理由は、東日本の古墳でありながら、当時の日本の政治や外交などの一端が伺える資料だからです。

風返稲荷山古墳に葬られた人物は、厩戸王（聖徳太子）と同世代に生きていました。厩戸王は、推古天皇の摂政として数多くの政策を立ち上げ、日本の改革を実行した人物です。厩戸王の政策との関わりを示す品が銅鋺と馬具です。

中国大陸や朝鮮半島では一般的であった金属の器を使用する文化を取り入れ、各地方豪族に分配されたのが銅鋺です。

諸外国の使節が来日した際にお迎えしたのは、飾馬にまたがる豪族たちでした。飾馬とは、金銅製の馬具が装着された馬のことです。この金銅製の馬具は、飛鳥地域の工房で最先端の金属加工技術を駆使し製作されました。当時、馬具を製作する技術者は、仏像や仏具も製作しており、風返稲荷山古墳の馬具には、法隆寺夢殿救世観音の冠と似た模様が施され、ともに飛鳥の工房で製作された可能性があります。

その他の出土品の飾大刀は、朝鮮半島にあった新羅の影響がみられるものや、当時政権を誇っていた物部氏によって分配されたと考えらえるものなど、それぞれの出土品が当時の歴史と関係しています。風返稲荷山古墳出土品は、厩戸王の時代を色濃く物語る資料として重要なことから、国指定重要文化財となりました。

問 歴史博物館 ☎ 029-896-0017